

ベトナムへの 栄養学教育の全面輸出

十文字学園女子大学人間生活学研究科食物栄養学専攻兼食物栄養学科教授・
(公社)日本栄養士会国際交流委員会委員

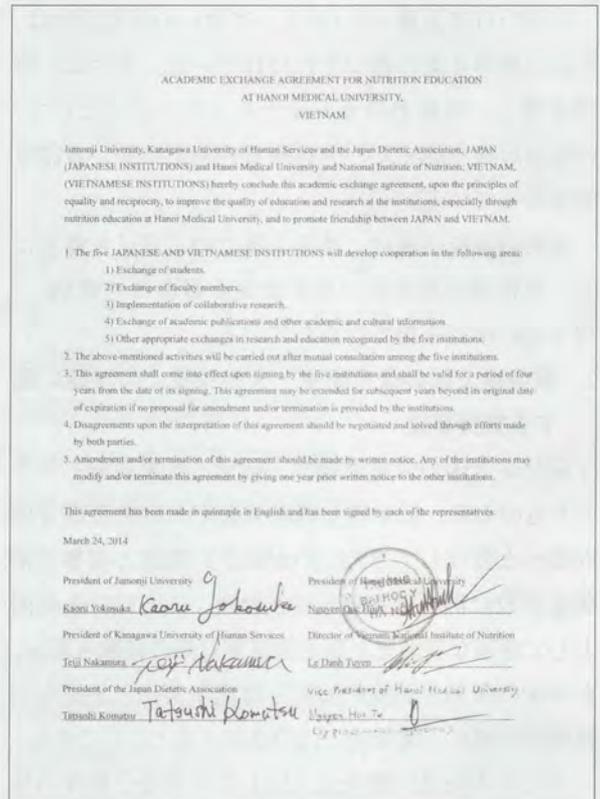
山本 茂

山本 茂◎やまもと しげる

- 1968年 徳島大学医学部栄養学科卒業(栄養学学士)
- 1970年 コロンビア大学医学部大学院修士課程修了
(国際栄養学、フルブライト留学生)
- 1975年 徳島大学大学院栄養学研究科博士課程修了
(保健学博士)
- 1987年 琉球大学医学部保健学科栄養学教室教授
- 1997年 徳島大学医学部栄養学科教授
- 2006年 徳島大学名誉教授、お茶の水女子大学大学院教授
- 2011年 お茶の水女子大学名誉教授、十文字学園女子大学教授、アジアの栄養・食文化研究所所長、現在に至る
- 2013年 ベトナム国立栄養研究所名誉博士
- 2015年 ハノイ医科大学名誉教授

ベトナムの最高学府である国立のハノイ医科大学およびベトナム国立栄養研究所と(公社)日本栄養士会(以下、本会)、神奈川県立保健福祉大学(神奈川県横須賀市)、十文字学園女子大学(埼玉県新座市)は、平成26年3月24日、同医科大学に平成25年10月に新設されたベトナム初の4年制栄養学課程の支援に関する協力協定を締結した。同栄養学教育には、ベトナム側では2者、日本側では3者で、5者協定と呼ぶ。同時に、日本側3者と味の素(株)は、個別にベトナム2者と3者協定を結び、留学生の招聘等で、より動きやすい形を取り入れた。

栄養学教育には、日本のカリキュラムを導入し、日本から約25人の教員(客員教授拜命18人を含む)、事務調整官2人と、30人近い人員を派遣する等、学部全体を丸ごと“輸出”するような協力形態で、新たな国際教育交流の姿としても注目され、多くのマスコミでも取りあげられた。



締結した5者協定書



交流協定調印式典(5者協定)(左より、本会会長、ベトナム国立栄養研究所所長、ハノイ医科大学副学長、十文字学園女子大学副学長、神奈川県立保健福祉大学学長)



ハノイ医科大学での神奈川県立保健福祉大学中村先生授業風景



1 期生と筆者の記念写真



ハノイ医科大学栄養学課程で講義する神奈川県立保健福祉大学外山先生

1 日本式栄養学カリキュラムの導入の理由

ベトナムが、日本式の栄養学を取り入れようとした背景には、近年のベトナム人の健康への関心の高まりがあると思われる。ベトナムでは、長い間、低栄養が国民に蔓延する健康問題であったが、近年の急速な経済発展に伴い、低栄養の減少と相まって過剰栄養が問題となってきた。いわゆる、発展途上国の栄養問題の二重苦 (double burden of malnutrition) である。

過剰栄養により、肥満、糖尿病、心臓病等が顕著に増加している。ベトナムと同じように米を主食とする食文化を持ち、肥満率が欧米ほど高くない日本人の栄養のあり方は参考になるであろう。ちなみに、日本人の平均寿命は延び続け、約半世紀の間、世界トップクラスを維持している。過去約40年間の肥満率 (BMI30以上) の増加は、米国では約15%から33%に、イギリスでは約7%から25%に増加したが、日本では約2%から約3.5%で、増加は比較的小さい。

近年、東南アジアでも肥満が増えている。2011



肥満の多いハノイの小学生(筆者撮影)

年の世界保健機構 (WHO) によると、肥満の定義を BMI25 以上としたときの肥満率は、日本の約24%に対して、マレーシア約44%、タイ32%、フィリピン約26%、インドネシア約22%、ベトナム約10%と日本を上回る国が多くなっている。子どもたちにも、同様の傾向が見られる。

今や、ベトナム都市部の子どもの肥満率は、日本よりも高い。日本の子どもの肥満は、最近の10年間は低下している。

2 管理栄養士・栄養士の必要性

日本の病院や学校で優れた給食が実施されている

のは、それぞれの施設に食と栄養の豊かな知識を持ったプロフェッショナルである管理栄養士・栄養士が存在するからであろう。管理栄養士・栄養士のいない病院食や学校給食はどのようなものであろうか。栄養学の知識の乏しい食事作り担当者が作る食事では、経験に頼った料理で、空腹を満たすため、言い換えればエネルギーを満たすことだけを考えた食事になるだろう。

事実、ベトナムのほとんどの病院では、院内の食事が整っておらず、食事時間が来ると、病院に売りに来る弁当を買う。疾患別の食事というのは、ほとんど期待できない。学校でも、エネルギーを満たすことが中心になる。おいしくない食事は、食べ残しが多くなる。その結果、子どもたちは空腹になり、それを満たすために安くて口当たりの良いファストフードや甘いソフトドリンク、ジュース類を多用することになる。管理栄養士・栄養士が配置されていない米国の学校給食でも、栄養素の必要量は満たしても、食文化的な配慮が少なく、ファストフードを多用する結果になっている。

以上のようなことは、食事と栄養のプロである管理栄養士・栄養士のいない環境では当然起こることになる。ベトナムは、まさにそのような環境にあり、今、そこから脱しようとする試みが、ハノイ医科大学での栄養士教育の開始と言えよう。

英語で栄養は nutrition、食事は diet である。しかし、日本では栄養士を英語にするときに dietitian としている。この言葉は、栄養士イコール食事の専門職という印象を招きやすい。そのために、病院栄養士も学校栄養士も、食事を作る仕事の人という印象を与える。事実、日本の栄養士の歴史を見ると、食事を作る仕事からスタートし、今も多くの栄養士は食事提供の業務が中心である。

一方、病院に勤務する管理栄養士の多くは、患者の栄養状態を知り、改善するための、栄養学的に最適な食事を提供する役割を担ってきている。また、日本の学校栄養士 (school dietitian) の領域では、栄養教諭 (nutrition teacher) 制度ができ、子どもたちの健康を知り、それを食事に反映するという高度な活動レベルに達している。特に、学校給食を通じた食育プロジェクトは、子どもたちの食や生産者

に対する感謝を育み、生産者は子どもたちの喜ぶ顔を知ることによって一層おいしい食事を作る意欲を起すという、望ましい循環が生まれている。

ベトナムでは、初の栄養士という専門職が誕生するにあたり、彼らの業務を社会に認識してもらうための、新しい名称が必要かもしれない。たとえば、病院栄養士は nutrition therapist、学校では nutrition teacher というような。

3 卒業生の活躍が期待される分野

ハノイ医科大学の栄養学課程卒業生は、同国初の栄養の専門職として、病院および学校をはじめとして、大学の教員、研究者、行政、地域での活躍が期待される。

上述したように、ベトナムでは低栄養と過剰栄養の二重苦がある。その問題解決のために最も有効で重要なのは、子どもの栄養対策であろう。日本には、今、約 13,000 人の栄養教諭・学校栄養職員が配置されており、日々異なる独自のメニューを年間約 200 食作る。ベトナムは人口も日本に近く、子どもも多いため、学校に栄養教諭を配置するには、現在の年間 50 人程度の養成ではとても充足できない。

4 ハノイ医科大学栄養学課程

1. 学生

ベトナムの大学では、入学は全国统一試験の結果をもって決められる。学生は、第1志望と第2志望の分野に応募することができる。

ハノイ医科大学栄養学課程の定員は 50 人で、9 月からは第 3 期生が入学した。成績は非常に優秀で、半数はベトナムで難関である国立大学の医学課程に入学できる学力とのものである。彼らには、栄養学分野の教員、研究者、その他の分野のリーダーとして、ベトナム栄養界で果たすべき役割があることを考えると、その期待に応え得る人材が集まると、まずは喜ぶ限りである。

2. 教育方法

4年間の教育で、最初の1年半は、ハノイ医科大学の他学部（医学、看護）の学生と同じように一般教養を学ぶ。授業は年間2期制で、前期9～1月、後期2～6月である。すなわち、第1期生は、現在3年生の前期の授業を受けている。

本会所属の日本側教員を中心に約25人が派遣され、各人2～10単位の授業を行っている。日本側教員は、何度も出向くことができないので、講義は1～2週間の集中方式で行っている。また、日本から派遣のための各種手続きや、ベトナム側の教官・学生の日本招聘等の各種事務作業は、本会と十文字学園女子大学の事務官があたり、ハノイ医科大学から正式に調整官として任命されている。

授業は、日本側教員とベトナム側教官がペアとなり、日本人教員が主にスライドを使って英語で授業を行っている。ベトナム側教官は、学生が理解できるように補足を行い、質問等があれば、日本人教員と共に回答している。

3. 第2期生以後の学生への授業

第1期生の講義は、日本側教員とベトナム側教官がペアで担当し、第2期生以後の教育にはベトナム側教官が大部分を担当し、日本側教員の派遣を暫時減らし、4年目には100%ベトナム側で実施する。ただし、日本側も講演等は必要に応じて対応する。第1期生への講義資料（主にスライド）はベトナム語の訳文を付けて、第2期生以後の学生への講義に利用する。この経験をもってベトナム側教官は、翌年以後の授業を担当できることになる。

第2期生以降の学生で特に利用したいと考えているのは、ITを使った、いわばテレビ会議・講義のシステムである。学生は、準備したスライドやビデオをまず見て、その後、日本側教員とベトナムの教室にいる学生・教官との間でITで対話を行い、十分に理解してもらえるようにする。また、授業の進行に伴い、利用したスライドやビデオをもとに教科書を作成する。

4. 実験・実習担当

栄養学をよく理解するためには、実験・実習は不可欠である。実験・実習は長時間を要するため、日本側教員が指導するのは困難である。それ故、年



学生の食品学実験の練習の様子(十文字学園女子大学)



実習指導教官の指導方法のトレーニング(十文字学園女子大学)

間2人程度のベトナム側教官を日本に2～4週間招聘し、学生実験・実習に参加してもらい、学んでもらっている。実験には、特別な器具を必要とすることも多いので、ビデオ撮影を行い、日本で行っている方法も実際に目で見てもらえるようにしている。

5. 学生の日本への招聘

平成26年度には、5人の学生と3人の教官、27年度には7人の学生と3人の教官を2週間、日本へ招聘した。滞在中は、本会およびその他の協定大学での授業や実習、学校や病院の管理栄養士の業務を視察した。最終日は、日本で学んだことを報告し、議論するワークショップを行った。

5 法的整備

学生にとっては、将来どのような分野で活躍できるかは、非常に気になる場所である。将来に具体的な希望が見えなければ、学生の勉学意欲は低下し、優秀な学生を確保することも困難になるであろう。この解決策として、栄養士の配置規定をはじめとする栄養法規の整備が必須であろう。これまで、ベトナムには栄養士がいなかったため、栄養士の法的な整備も全く無い。法整備のためには、行政官に実際に日本の実情を見てもらうのが効果的と考え、これまで3回にわたり、ハノイ医科大学学長、ベトナム国立栄養研究所所長、保健省行政官等約30人を日本に招聘し、病院の栄養管理、学校給食、地域保健センター、大学等の視察をセッティングした。

このようなことは、本会のサポートがあって、初めて可能となったものである。最近、ベトナムにおいて、Job Code なるものが成立した。これは、「栄養士なるものが存在する」ということを示した規則で、栄養行政の基礎として評価はされるものの、病院には何人を配置する、病院ではどのような業務を行う等、具体的な栄養法規は無く、これからの奮闘が望まれる。

6 政府・他大学等への依頼

ベトナムで初めての栄養学課程(ハノイ医科大学)の教育は、日本からの教員の派遣にとどまらず、ベトナムからは実験・実習教官、学生、法整備のための人たちの招聘までの多くの人たちの努力で、難しい問題を解決しながら、進んできた。

国際協力で活動する多くの方からは、このプロジェクトほど、日本人と現地が綿密な計画のもとで円滑に、しかも明確なコンセプトのもとに進んでいるものは少ないという高い評価を得ることができていることは、何よりもうれしいことである。しかし、現在の協力者の力で実施可能なのは、ハノイ医科大学栄養学課程への援助が限界であろう。同じような活動は、ベトナム全土で、さらには東南アジア

全体で起こってほしい。ベトナム国内においても、10医科系大学以上での設立が望まれる。しかし、現在のハノイ医科大学の学生がリーダーになれるのは5年以上先のことであろう。

冒頭でも述べたように、日本人の寿命は世界トップグループの1つであり、それをもたらした第一の要因は、日本人の食と栄養であろう。日本人と同じように、米を主食とする食文化を持つ東南アジアの人たちの健康増進には、貢献できることが多々あろう。

しかし、現実には、肥満とそれに関連する疾患で最も大きな問題を持つ米国の栄養学が幅を利かせている。留学生の多くは米国に行き、日本に来るのはほんの一握りである。私たちは、栄養学教育の芽だけを出す仕事はできたが、今後は、日本の政府、大学、その他関係機関が力を合わせ、より多くの場所で、より大きなプロジェクトを営んでほしい。このような社会貢献こそが、日本に対する信頼とシンパシーを生み、そのことは栄養学だけでなく、政治、経済、農業、工業等あらゆる分野に対して好ましい結果を生むであろう。

私たちの小さな努力が、国家間の友好関係につながり、世界の人びとの健康増進にまでつなぐことができれば、どんなにすばらしいことであろうか。成熟してきた日本社会の目指すべきモデルにもなり得るものと期待する。